

学会トピック◎第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会

メチシリン耐性*S. lugdunensis*が国内でも増加の可能性

2022/11/08

中西 亜美 = 日経メディカル

皮膚に常在するコアグララーゼ陰性ブドウ球菌（CNS）でありながら、黄色ブドウ球菌に匹敵する病原性を持つことが知られているスタフィロкокカス・ルグドゥネンシス（*Staphylococcus lugdunensis*）。近年、近隣アジア諸国では*S. lugdunensis*のメチシリン耐性株が増加していることが報告されているが、我が国でも同様の可能性があると示された。第71回日本感染症学会東日本地方会学術集会・第69回日本化学療法学会東日本支部総会合同学会（2022年10月26～28日、開催地：札幌市中央区）にて、杏林大学医学部総合医療学教室感染症科の嶋崎鉄兵氏が報告した。



杏林大の嶋崎鉄兵氏

*S. lugdunensis*は、1988年にフランスで初めて報告されて以降、ヒトへの病原性が注目されており、弁置換術を要する感染性心内膜炎や血管内デバイス感染など、重篤な感染症の原因菌となり得る（関連記事：皮膚常在菌なのに侮れない*S. ルグドゥネンシス*）。一方、他のCNSとは異なり、*S. lugdunensis*のメチシリン耐性株はまれで、セファゾリンなどのメチシリン感受性黄色ブドウ球菌（MSSA）治療に用いられる抗菌薬に対しては感受性を有するとされていた。

しかし、近年の台湾、シンガポール、中国からの報告では、*S. lugdunensis*におけるメチシリン耐性株が従来の5%未満から5～20%に増加していることが報告されている。

そこで嶋崎氏らは、杏林大学医学部付属病院において過去10年間に臨床検体から検出された*S. lugdunensis*のメチシリン感受性試験結果の推移を検討し、近隣アジア諸国と同様の変化が認められるか検討した。

調査対象は、2012年から2021年にかけて同院にて提出された臨床検体のうち、*S. lugdunensis*培養陽性だった589検体。検体の内訳は、皮膚・創部膿372検体、血液培養72検体、血管内デバイス30検体だった。これらのメチシリン感受性試験結果を2017年以前と以降に分け、メチシリン耐性株の割合をカイ二乗検定で評価した。

調査の結果、全589検体のうち、メチシリン耐性株は97検体（16.5%）だった。そのうち、2012～2016年では149検体中15検体（10.1%）が、2017～2021年では440検体中82検体（18.6%）がメチシリン耐性株であり、検出頻度の経時的な増加が示唆された（ $P < 0.05$ ）。

なお、臨床検体を血液培養に限定すると、72検体中7検体（9.7%）にメチシリン耐性株を認め、2012～2016年は20検体中2検体（10.0%）、2017～2021年は52検体中5検体（9.6%）だった。

この結果を踏まえ、嶋崎氏は「他のアジア諸国と同様、当院でも*S. lugdunensis*のメチシリン耐性株が増加していることが明らかとなった」と結論。また、「単施設後ろ向き観察研究であるため、病院・地域間で感受性結果の傾向に差がある可能性があるが、*S. lugdunensis*が臨床検体から検出された際は、安易にコンタミネーションとはせず、病原性を疑い、感受性検査を実施するなど慎重な対応が求められる」と指摘した。